

W-BRIDGE

'12年度活動報告



Waseda-Bridgestone Initiative for Development
of Global Environment

W-BRIDGE

Message

地球環境保全のための「架け橋」を目指して

早稲田大学と株式会社ブリヂストンが連携して進める「W-BRIDGE」は、環境問題という人類共通の課題に対し、産学連携に加え、環境 NGO や市民団体といった一般の生活者の方々にも参画いただき、三者一体で研究・活動を行える枠組みを提供するプロジェクトです。企業と大学の連携に、地域の生活者との連携をプラスして、二つの架け橋、つまりダブルブリッジに基づいた実践的な研究・活動を支援していくことを目的としています。

2008 年 7 月のスタート以来、のべ 71 件のプロジェクトを支援してきました。研究者と市民そして学生の上に架け橋をわたして、ともに地球環境を守るための研究・活動をすすめています。

世界的な業績を上げた研究者や著名な NPO 活動者から、それぞれの地域で生活と環境を守っているみなさん、未来への希望に満ちた学生まで一緒に手を携えて行動をしています。ちょっと照れくさいですが、地球とみんなの「しあわせ」を目指して。

W-BRIDGE (Waseda-Bridgestone Initiative for Development of Global Environment) は早稲田大学環境総合研究センター内に設置された産学連携プロジェクトです。

以下に示す株式会社ブリヂストンが定めた 4 つの領域で募集を行い、早稲田大学および早稲田大学提携校等に所属する研究者と民間団体などの連名で応募いただき、審査委員会および運営委員会の審査を経た案件に対し、早稲田大学環境総合研究センターから研究・活動を委託しております。

1. 企業や生活者がともに自然と共生していく方法を考える
2. 資源を大切に使い循環させる仕組みを、生活者とともに考える
3. 2050 年の視点から CO₂ を減らす方法を、生活者とともに考える
4. 環境保全の知見や手法を世界にひろげ、次世代とともに学ぶ方法を考える

また、研究・活動を支え、情報を発信する活動も併せて行っています。2012 年 11 月 1 日現在、のべ 71 件のプロジェクトが採択されており、対象地域もインドネシア、東北復興地域から早稲田の町内会まで、研究者も海外の大学からの参画も含み、連携する民間団体も東北復興地域の住民組織、商工会、地域団体、ジャーナリスト団体、学生団体など多様な広がりを見せています。

本レポートの内容は、W-BRIDGE プロジェクトの第 4 期の活動の概要を表したものです。詳細は、Web サイト (www.w-bridge.jp) をご覧いただくか、W-BRIDGE 事務局（連絡先は裏表紙に記載）までお問い合わせください。





写真 上：(秋吉プロジェクト)
畑の種まき、ブルーベリーの花

中：(森川プロジェクト)
南カリマンタン森林修復地

下：(加藤プロジェクト)
稲のはさ木干し、稲刈り



ご挨拶

代 表 堀口健治

W-BRIDGE (Waseda-Bridgestone Initiative for Development of Global Environment の略) は、地球環境の保全に貢献するために、早稲田大学と株式会社ブリヂストンの連携で、早稲田大学環境総合研究センター内に設置された産学連携プロジェクトで、地球環境分野において、従来の産と学の連携に、地域の生活者との連携を加え、二つの架け橋、つまりダブルブリッジに基づいた実践的な研究・活動を支援し、その成果を広く発信していきます。

早稲田大学は、環境分野においては、理工学系と人文社会科学系が協働して問題に取り組むことが重要であるとの認識から、学問領域統合型のアプローチを旨とする環境総合研究センターを設置して活発な研究展開を行うとともに、大学院環境・エネルギー研究科を設置して、時代の課題に応えた大学院教育を展開して参りました。

株式会社ブリヂストンは、環境宣言に掲げる“未来のすべての子どもたちが「安心」して暮らしていくために…”という変わらぬ思いのもと、かねてから経営の最重要課題の一つとして環境経営活動を積極的に実践して参りました。すなわち、生産活動における環境負荷軽減をはじめとし、環境対応商品の開発・販売やリトレッド事業の展開など、広範囲な事業領域だけでなく、地域的な広がりもふまえた多様性のある活動を展開して参りました。



そして双方は、日々深刻化する地球環境問題解決の道筋を明らかにするという、企業および大学の社会的使命を果たしていくためには、従来の企業と大学の連携の枠を超えた、人々の生活により近づいた取り組みが必要だと考え、2008年7月に当プロジェクトをスタートさせました。

地球環境問題は、人類、ひいては全ての生物に関わる問題であり、その解決のための研究は、地域に生活する人々による実践的なものでなければなりません。本プロジェクト設立の意図は、生活者としての一般の人々に参加して頂けるような枠組みを作ることです。

今期は、2011年3月に発生した東日本大震災からの復興を、W-BRIDGEの重要なテーマの一つとして掲げ、復興地域の生活者の方々が主体として取り組む複数の環境プロジェクトを採択し、W-BRIDGEプロジェクトの総力を挙げて推進しております。

本当に持続可能な社会を実現していくには、人間の生活というものを無視して進めることはできません。地域で実生活に根ざした活動をされている方々を、産学の連携に巻き込み、一緒に課題解決に取り組んでいく、そういう三者連携の新しい枠組みで、地球規模の問題解決に貢献していきたい。また、得られた成果は広く世の中に発信し、多くの方々に活用していただけるようにしていきたいと、当プロジェクトは考えます。

皆様におかれましては、当プロジェクトの趣旨をご理解いただき、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



写真 左から順に
秋吉プロジェクト
岩井プロジェクト
納富プロジェクト
永田プロジェクト
島谷プロジェクト
エコピアの森
加藤プロジェクト



企業や生活者がともに自然と共生していく 方法を考える

企業 CSR と地域交流

＜研究・活動名＞企業CSRを通じた「農山村－都市」連携

＜代表者 / 団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 黒澤正一 / 木島平村（農村文明塾）ほか

ISO26000 準拠の本業 CSR を基盤として、農山村の資源や価値を見出し、都会の企業に活用法を助言する手法の研究と実践を目指しています。具体的には、①CSR スタート確認制度の確立、②A-EMS の活用ウェブサイト開発、③ISO26000 活用ガイドラインの作成、④農山村プログラム活用マニュアルの整備などを実施しています。

（2010 年 7 月より半年に一回の審査を受けて継続中）

熱帯ゴム園周辺の森の再生

＜研究・活動名＞インドネシア南カリマンタン州の大森林公園における生物多様性修復

＜代表者 / 団体＞早稲田大学人間科学学術院教授 森川 靖 / （公財）国際緑化推進センター、インドネシア国立ランブン・マンクラット大学

世界的に、通常の植林活動では、地域住民の継続的な便益がなく、頻繁に山火事が発生する等、植林地が持続しない例が多いとされています。インドネシア南カリマンタン州のブリヂストングループのゴム農園周辺の広大な地域において、W-BRIDGE モデルを適用した緑の回廊の構築を行いました。生物多様性に配慮した森林修復と、地域住民参加による薪林造成等によって、持続可能な木質バイオマスエネルギー利用のモデルとなり、地元有力紙で紹介されるなど重要な成果を上げています。（2009 年 1 月より半年に一回の審査を受けて継続中）

農林業体験を通じて若者へ食と環境の問題を提起する

＜研究・活動名＞若者の持続的な食意識の向上を促す農林業体験ツアー構築に向けた研究

＜代表者 / 団体＞早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター助教 秋吉 恵 / WAVOC「農と食と緑の学校 in おけら牧場・ラーバンの森」

若者の食意識の向上および食行動の改善に向けたツアーモデルを、福井県三国町における農家滞在型の農林業体験を通して作成・検証しています。ツアー後の日常生活において、食意識は向上したが不定着であることが今後の課題となっています。若者の食に対する意識の変容、および地産地消・国産農作物の選択増加は、現在の食生活が与える地球環境への負荷を将来にわたって軽減する可能性を持つことなどから、2012 年の内閣府「食育ボランティア表彰」を受けました。（2009 年 7 月より半年に一回の審査を受けて継続中）

写真 (森川プロジェクト)
南カリマンタン森林修復地 (右)
地域住民へのヒアリング (左)



写真 (秋吉プロジェクト)
養鶏 (左上)
畑作業 (左中)
子どもたちへの調理指導 (左下)
内閣府「食育ボランティア表彰」
(右上)



写真 (黒澤プロジェクト)
高校生によるCSRファンレター
表彰 (右下)





資源を大切に使い循環させる仕組みを、生活者とともに考える

地域で取り組むいばらきエコ・ネットワーク

＜研究・活動名＞地域連携で生み出すいばらきエコ・ネットワーク STEP3 ー生活者が生み育てる グッドプラクティスの発信 ー

＜代表者 / 団体＞茨城大学地球変動適応科学研究機関 (ICAS) 准教授 田村 誠 / 城里町商工会 女性部、筑西市商工会エコの木プロジェクト部会

「知 (= 知る)」、「連 (= 連携)」、「創 (= 創る)」、「展 (= 広げる)」をキーワードに、地域住民が主体となって地域活性化と環境保全活動とが両立する仕組み構築を目的として、これまでに得られた成果や教訓をグッドプラクティスとして県内外に発信し、より大きなエコ・コミュニティ“いばらき自然エネルギーネットワーク”を設立し、大学を媒介に地域組織の連携により地域活性化と環境保全を両立する仕組みづくりを目指しています。(2009 年 7 月より半年に一回の審査を受けて継続中)

貴重な鳥の生育地域で、コモンスの再生に取り組む

＜研究・活動名＞新潟県佐渡市トキ舞う加茂湖の水辺再生プロジェクト phase2

＜代表者 / 団体＞九州大学大学院工学研究院環境都市部門教授 島谷幸宏 / 佐渡島加茂湖水系再生研究所

トキの野生復帰に取り組む新潟県佐渡市では、多様な生き物が棲息可能な環境整備が重要な課題となっています。本活動の秋津地区「こごめのいり」は、加茂湖のなかでも特に水の流れが悪く、漂着ゴミ被害が問題となっていました。この地区のヨシ原再生を継続するとともに、より多くの人びとが加茂湖を訪れるためのしかけづくり、水辺の維持管理のための仕組みづくり、環境資源活用の工夫、多様な主体の協働の推進、子どもたちの社会参画などの研究と実践を進めています。(環境省等主催 eco japan cup 2012 市民が創る環境のまち“元気大賞”入賞)(2010 年 7 月より半年に一回の審査を受けて継続中)

女性生活者が取り組む環境・社会貢献活動

＜研究・活動名＞女性生活者による 3R 活動による地域貢献について

＜代表者 / 団体＞大阪市立大学大学院創造都市研究科准教授 永田潤子 / NPO 法人中部リサイクル運動市民の会

女性生活者による 3R 活動を通じた環境問題の解決を推進するために、①社会に働きかけるコンセプトと個人へのメッセージからのアプローチ検討と実証実験 ②ビジネスモデルとして持続可能性を担保する仕組みに関する研究 ③百貨店やショッピングモール等に回収 Box を設置するなど利便性の確保策による推進に関する研究と実践を実施しました。(2012 年 6 月終了)



写真（島谷プロジェクト）
水路の整備（左上）
整備作業前（右上）
整備作業後（左下）
ヨシ原の清掃（右下）



写真（田村プロジェクト）
夏の電力ピークカットのための
「みどりのカーテン」（左）
非常用電源にもなるソーラーバイク
（右2点）



(第2領域 つづき)

2R 活動の普及促進に関する研究

＜研究・活動名＞利用者視点から見た 2R（Reduce・Reuse）の普及促進に関する実証研究

～地域共創型の社会システムの実現を目指して～

＜代表者 / 団体＞早稲田大学環境総合研究センター准教授 小野田弘士 / 生活協同組合コープおおいた、（社）日本自動車リサイクル部品協議会

生活者のライフサイクルが“環境配慮型”に転換されつつある中、利用者に焦点をあてた活動を展開しています。とりわけ、自動車リサイクル部品の活用促進を通じて、Reuse に関する共通認識を地域生協や関連するステークホルダーと一体となって醸成することを目的に、早稲田大学で培われた環境配慮情報提供システムを核とした地域共創型の社会システムの実現を目指し、2R 活動の深化、特に影響力の強い自動車関連の取り組みを通じた社会システムモデル化の達成に向けた取り組みを実施しました。（2012 年 6 月終了）

貴重な鳥の生育地域で、地域活性化に取り組む

＜研究・活動名＞やんばる国頭の森の水路再生・棚田ビオトープ整備による地域活性化プロジェクト

＜代表者 / 団体＞東京工業大学大学院社会理工学研究科・価値システム専攻教授 桑子敏雄 / NPO 法人 国頭ツーリズム協会

国頭村にある「やんばるの森」は、生物多様性の保全と利活用の問題で注目され続けており、「森林地域ゾーニング計画」で情報が不足していた文化遺産を調査し、「宇嘉地区の水路と棚田」の再生・活用を行うことで、ゾーニング計画の理念を実践し、地域活性化を図っています。全国的にも注目を浴びるエリアでの研究・活動であり、地域との強力な関係をテコに、企業の森の管理や CSR 活動にも生かせる研究・活動が行われ、ゾーニングなどに生かされつつあります。（環境省等主催 eco japan cup 2012 市民が創る環境のまち“元気大賞”入賞）（2012 年 6 月終了）



W・B・R・I・D・G・E (早稲田大学・鶴管リデザイン) 研究プロジェクト

宇嘉棚田水路散策 & 田植え体験

宇嘉棚田再生友の会主催

**参加歓迎
参加費なし!**

昭和14年、国領村宇嘉区の山に、約5haの棚田と水路が整備され、昭和60年度まで自給米が栽培されていました。2本の水路機がある人力で作られた水路と海のみえる棚田は、宇嘉の人々にとって無量な恵もたらやむを得ない遺産として守り継がれています。17年前には小学校の授業で棚田の一部を復元したが、3年間米を作っていました。今回は、再生した水路から水を引いて作ったばかりの2枚の棚田で、みんなで田植えを体験します。田植えの前に森の中の水路を歩きます。

◆ 日 時: 5月26日(土) 午後1時20分～

◆ 集合場所: 宇嘉共同店前

◆ スケジュール

午後1:30 棚田水路散策
2:30 田植え
3:30 交流会(軽食をとりながら)

● 問い合わせ先 ●
宇嘉区長 宮城幸一 090-1947-3668 (携帯番号)
宇嘉区長 宮城幸一 (やんばる守りの森内) 0980-41-1979

※この活動は、W・B・R・I・D・G・E (早稲田大学・鶴管リデザイン) 研究プロジェクトの支援で行っています。

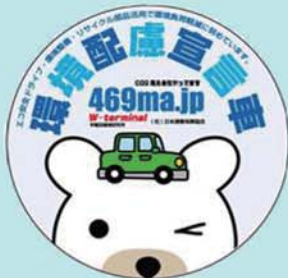


写真 上: (桑子プロジェクト)
水路の探索 (左)
イベントポスター (右上)
棚田田植え体験 (右下)

中: (小野田プロジェクト)
環境配慮宣言車ステッカー



下: (永田プロジェクト)
エコロジーセンター「Re 創庫」(左)
古着回収ボックス (右)





企業や生活者がともに自然と共生していく方法を考える

「企業 CSR と地域交流」(p5)

「熱帯ゴム園周辺の森の再生」(p5)

「農と食と緑の学校」(p5)

新規プロジェクト

「被災地と首都圏の女性の交流による、復興促進」(p17)

資源を大切に使い循環させる仕組みと生活者とともに考える

「いばらきエコ・ネットワーク」(p7)

「トキの生育環境保全」(p7)

「女性生活者による3R活動による地域貢献」(p7)

「利用者視点から見た2R (Reduce, Reuse) の普及」(p7)

「やんばるの森」(p9)

新規プロジェクト

「豊富な水資源活用による地域活性化」(p17)

「世界遺産(五箇山)集落における植物資源循環」(p17)

「10万馬力新宿サイダープロジェクト」(p17)



環境保全の知見や手法を世界にひろげ、 次世代とともに学ぶ方法を考える

「じよんのびプロジェクト」(p15)

「大震災を考えるプロジェクト」(p15)

「日本とマレーシアの国際交流による環境意識の育成」(p15)

「島の歴史、文化と環境学習の融合」(p16)

新規プロジェクト

「ふゆみずたんぼの実践研究」(p17)

「次世代エコチャレンジャー養成活動」(p17)

「いばらきエコ・ネットワーク」は、来期はこの領域



2050年の視点からCO₂を減らす方法を、 生活者とともに考える

「東北復興を契機に日本を持続可能な社会へ」(p13)

「被災地再生可能エネルギー」(p13)

「学生と地域がともに取り組む環境ビジネスの創出」(p13)

新規プロジェクト

「被災地いわきにおける再生可能エネルギーを核とした
地域づくりに資する人材育成」(p17)



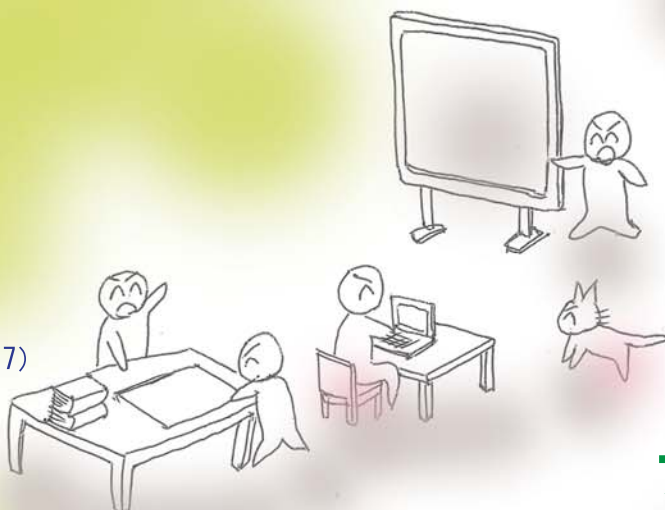
を、

o7)

及促進」(p9)

景の再生」(p17)

)



W-BRIDGE
プロジェクトマップ



2050 年の視点から CO₂を減らす方法を、生活者とともに考える

被災地復興の取り組み ー自然エネルギー導入による CO₂ 削減ー

＜研究・活動名＞東北復興を契機に日本を持続可能な社会へ～バイオマス資源の適正利用を中心に～

＜代表者 / 団体＞岩手大学農学部准教授 伊藤幸男 / NPO 法人バイオマス産業社会ネットワーク

東北復興を契機に日本を持続可能な社会へ転換するにあたり、独自の研究で導き出した適切で効果的なバイオマス利用促進策が行われるよう働きかけ、岩手県などを中心に、移動型バイオマスボイラーによる避難所などへの給湯事業が報道で取り上げられるなど大きな評価を得ました。また、研究会などを通じて地域や各界の意見を集約し、政府や関係自治体などへの情報提供を進めており、大きな成果を得られています。(2011 年 7 月より半年に一回の審査を受けて継続中)

被災地復興の取り組み ー地域復興のための再生可能エネルギー導入ー

＜研究・活動名＞被災地を中心とした地域復興のための再生可能エネルギーの実装に関する研究

＜代表者 / 団体＞群馬大学大学院工学研究科教授 天谷賢児 / 大崎 - 塩竈 - 石巻 - 南三陸 PJ

被災地の復興を目指す事業の一環として、とりわけ再生可能エネルギーの導入のための合意形成手法、適正技術の導入手法などを研究開発し、多くの地域での実施に結びつける緊急かつ大きな意義を持つ事業であり、現在、大崎市、石巻市、南三陸町、釜石市等の活動に発展しています。(2012 年 6 月終了)

学生が未来の環境ビジネスを創出する

＜研究・活動名＞学生と地域がともに取り組む環境ビジネスの創出

＜代表者 / 団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科准教授 納富 信 / 新宿区エコ事業者連絡会

全国から学生と企業 150 名以上が参加し、全国環境ビジネスコンテストを開催。その過程から環境ビジネスのプラン策定時のポイントや学生の意識レベル等を調査・研究し、環境ビジネスの実例を web 等で発信し、学生や地域住民、企業の意識啓発を行いました。将来的には、環境重視型社会に環境ビジネスを理解している人財輩出を目指しています。(2011 年 7 月より半年に一回の審査を受けて継続中)



写真 (納富プロジェクト)
プランニング (左上)
中間発表 (左下)
ビジネスコンテスト (右上)
ロハス大賞最終審査 (右下2点)



写真 (復興関係合同プロジェクト)
東京ビッグサイトでのシンポジウム



環境保全の知見や手法を世界にひろげ、 次世代とともに学ぶ方法を考える

学生が担う地域活性化と環境保全

＜研究・活動名＞学生ボランティアと地域活性化による環境保全の連携に関する研究

＜代表者 / 団体＞早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター助教 加藤基樹 / WAVOC まつだい
早稲田じよんのび交流プロジェクト

新潟県十日町市松代地区の棚田の保全活動を行うとともに、菜の花を植え、作業や花見会を通し住民との交流を図りながら、自治会活動へも携わり、以前は活動に関わらなかった住民をプロジェクトへ取り込むきっかけを創出し、地域おこし協力隊との連携も図り、幅広い年齢層の参加が可能なシステムを検討し、実現してきました。地域(新潟県十日町市)からの評価も高く、ボランティア活動の計画手法、誘導手法の研究をベースに今後の各種地域活動が期待されています。(2009年7月より半年に一回の審査を受けて継続中)

被災地における知の対話

＜研究・活動名＞大震災・原発事故 VS 科学・宗教－社会規範再形成への実証研究

＜代表者 / 団体＞早稲田大学大学院アジア太平洋研究センター名誉教授 原 剛 / 日本環境ジャーナリストの会

大震災を契機に、ジャーナリズムは単なる客観報道から提唱、課題設定キャンペーン報道に重心を移しつつあります。コミュニティの離散を拒否する被災地のエートス（精神構造）と巨大な産業技術文明（原子力の科学）との相関、共生、反発の諸相を現場の地域社会で検証し、社会規範の再形成へのベースライン（prototype）を見出すことを試み、知の対話を踏まえた出版等を進めています。(2011年7月より半年に一回の審査を受けて継続中)

地域の人々と学生の交流から環境問題を考える

＜研究・活動名＞日本とマレーシアの国際交流による環境意識の育成

＜代表者 / 団体＞早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター助教 岩井雪乃 / WAVOC「海外ボランティアリーダー養成プロジェクト（ホルネオ）」

日本国内およびマレーシアサバ州コタキナバル市において活動を行い、ゴミ認識と廃棄行動の関係を明確にし、小学生が環境および衛生に関する知識を身につけ、主婦層のゴミへの意識が向上するといった成果を得ました。また、サバ人学生が移民との個人的つながりを形成するとともに、日本およびマレーシアの青年が社会のあり方や生き方を問い直すきっかけを得ることができました。(2012年6月終了)

離島を楽しむ学ぶプログラムの研究開発

＜研究・活動名＞豊島発 歴史、文化と環境学習融合プログラムの開発～自然ゆたかな豊島を楽しみながら学ぶ人類の営みと生活史～

＜代表者 / 団体＞徳島大学埋蔵文化財調査室助教 遠部 慎 / 豊島 島づくり委員会

瀬戸内の豊かな自然がいきづく楽園であると同時に、現代社会の矛盾のしわ寄せである産業廃棄物不法投棄問題で苦しんだ豊島を、自然環境破壊と文化や生活破壊を同じレベルで捉え、新たな価値の形成を実践し、体験型環境学習コンテンツとして展開し、地域の観光資源に繋げるといった研究・実践を行いました。(2012 年 6 月終了)



写真 (加藤プロジェクト)
棚田の田植え (左)
雪おろしボランティア (中)
地域の人たちとの調理交流 (右)



写真 (岩井プロジェクト)
現地小学校での環境教育 (左)

(原プロジェクト)
被災地取材 (中)

(遠部プロジェクト)
発掘作業 (右)

2012年7月～2013年6月期 新規採択案件

◎企業や生活者がともに自然と共生していく方法を考える

- ・住民参加による荒廃地森林造成および生物多様性向上（継続）
- ・被災地と首都圏の女性の交流による、復興を促進するネットワーク形成、および環境コミュニティビジネス・インキュベーション研究事業（新規）
- ・本業 CSR と人材育成を通じた「農山村－都市」連携（継続）
- ・耕作放棄地を“自然との共生の在り方”を学ぶ場とするロールモデルの作成（継続）

◎資源を大切に使い循環させる仕組みを、生活者とともに考える

- ・豊富な水資源「尚仁沢湧水」を地域活性化の為に保全活用する仕組み作り（新規）
- ・世界遺産五箇山合掌造り集落における植物資源循環の再生プロジェクト（新規）
- ・10万馬力新宿サイダープロジェクト（新規）
- ・新潟県佐渡市 トキ舞う加茂湖の水辺のふるさとづくりプロジェクト（継続）

◎2050年の視点から CO₂ を減らす方法を、生活者とともに考える

- ・企業と学生によるビジネスからの持続可能な社会の実現～環境ビジネスプラン創出と企業の環境活動の効果的な発信～（継続）
- ・東北復興を契機に日本を持続可能な社会へ～森林およびバイオマス資源の適正利用を中心に～（継続）
- ・被災地いわきにおける再生可能エネルギーを核とした地域づくりに資する人材育成（新規）

◎環境保全の知見や手法を世界にひろげ、次世代とともに学ぶ方法を考える

- ・「いばらき自然エネルギーネットワーク」を活用した地域人材育成（継続）
- ・学生と地域住民の連携による地域モデルとその環境保全に関する研究（継続）
- ・ふゆみずたんぼを通じた CEPA (Communication, Education and Public Awareness) の実践研究（新規）
- ・大震災・原発事故とジャーナリズム－社会規範再形成への実証研究（継続）
- ・次世代エコチャレンジャー養成活動（新規）



写真 有機米の田んぼ風景と有機栽培に役にたつ鳥たち
(マガンと白鳥)



写真 ソーラー街灯（左上）
小水力発電水車の作製（左下）
ソーラーパネルの手作り（右）

W-BRIDGE は、委託した各種研究・活動との連携のもとに、「生活者 / 地域」、「大学」、「企業」の3者を結び、より効果的かつ実生活に根ざした「地球環境問題への貢献」といった目的を達成するための、様々な活動を実施しています。



写真 上2枚：森林教室

左下：木の大きさの計測

右下：森の仕組みを学ぶクイズ



B・フォレスト エコピアの森

ブリヂストンが、低燃費タイヤ「ECOPIA」の売り上げの一部を活用し、全国8箇所※で森林整備や森林教室を行う「B・フォレスト エコピアの森」プロジェクトに対し、W-BRIDGE は環境教育活動の企画・実施の支援を行っています。

本活動では、W-BRIDGE に関わる専門家や学生が積極的に参画しており、小学校高学年の親子を対象にした森林の機能を学ぶフィールドワークをサポートしています。こうした交流を通じて、環境教育活動の在り方についての重要な知見を得ることが可能となったほか、これに関連して、森林保全活動に関する評価手法、地域植林活動における自治体との連携手法、間伐材の活用手法などの研究にも進展しています。

※2012年12月現在

<学術関連活動>

W-BRIDGEでは、各プロジェクト、事務局による学術専門誌への論文投稿はもちろんのこと（2011年に佐渡プロジェクト関連論文が感性工学会論文賞を受賞）、2010年1月 日本エネルギー学会バイオマス科学会議協力、2012年11月には独立行政法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター環境・エネルギー領域との共催で研究報告会を開催するなど、W-BRIDGEと関係する各学術分野で積極的な活動を展開しています。また、独自のシンポジウム・成果報告会も年数回のペースで実施しているほか、研究会を頻繁に開催し、各プロジェクトの質の向上に取り組んでいます。

＜成果の社会普及活動＞

W-BRIDGE では、研究・活動した成果を社会で活用して頂けるよう、行政などへの政策提案活動を各プロジェクト横断的に実施しており、その一環として、各種の表彰や提案募集への積極的な応募を進めています。この結果、環境省などが主催する「eco japan cup 2012 市民が創る環境の街」「元気大賞」の最終審査に、やんばる国頭の森でのプロジェクト、新潟県佐渡市でのプロジェクトがノミネートされるなど、大きな成果を上げつつあります。また、各プロジェクトの自主的な政策提案活動先も総務省、茨城県、新潟県佐渡市など多岐にわたっています。W-BRIDGE では、プロジェクトを単に継続させるのではなく、プロジェクトが段階的に成長することを支援しており、次の展開に至る積極的な「卒業」を奨励しております。その一例として、プロジェクトが大きく発展し、W-BRIDGE から国のプロジェクトに引き継がれたもの（香川県豊島でのプロジェクト他）なども出ております。

＜震災復興支援、研究成果活用＞

2012年12月現在、W-BRIDGEでは、岩手県、宮城県、福島県、茨城県、長野県の各被災地で、合計6件のプロジェクトが研究・活動を展開しており、震災復興にも一定の寄与をしています。また、各地（被災地以外も含む）で得られた成果を、W-BRIDGEモデルとして活用して頂くため、情報発信や人材育成のプロジェクトの実施とともに、総務省地域力創造グループ、Google等と連携により、波及効果の拡大を図っております。



写真 W-BRIDGE 成果報告会
(早稲田大学小野記念講堂)

アドバイザー・ボード

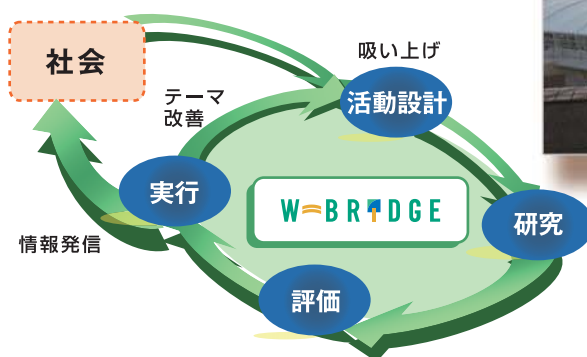
W-BRIDGEには本プロジェクトの趣旨にご賛同いただいた各界の専門家から構成されたアドバイザー・ボードが設置されています。研究領域・研究成果に対して随時助言をいただき、活動内容に反映しています。

(敬称略、五十音順)

池上清子	(環境と開発途上国問題の専門家)
大橋 力	(文明科学研究所長・芸能山城組主宰)
小畑秀文	(国立高等専門学校機構理事長)
崎田裕子	(ジャーナリスト・環境カウンセラー)
西岡秀三	(国立環境研究所特別客員研究員)
原 剛	(早稲田環境塾塾長)
三村信男	(茨城大学教授)
渡辺弘之	(京都大学名誉教授)



■ W-BRIDGEの機能



W-BRIDGE

「W」と「B」の間の二重線、ここに「二つの架け橋」の思いを込めました。つまり、産学の架け橋、そして、生活者との架け橋、の二つを表しています。また「I」の部分は、環境保全の代表的な対象である「木」のイメージ、そして青い部分が「地球」を表しています。私たちは、地球環境分野において、従来の産学という連携に加え、地球に生活している人々をも結ぶ二つの架け橋、名前の通りダブルブリッジになりたいと考えているのです。



写真 右2枚（桑子プロジェクト）
左2枚（納富プロジェクト）
下（島谷プロジェクト）



◆執行組織（運営委員兼任）

代表	堀口健治（早稲田大学）
副代表	堀尾正鞠（早稲田大学）
副代表	勝田正文（早稲田大学）
副代表	平田 靖（ブリヂストン）
研究マネジメントチームリーダー	岡田久典（早稲田大学）
事務局長	永井祐二（早稲田大学）
研究員	中島勇介（ブリヂストン）

◆運営委員

松田 明（ブリヂストン）	大聖泰弘（早稲田大学）
柴田唯志（ブリヂストン）	永田勝也（早稲田大学）



W-BRIDGE

'12年度活動報告



2012 年 12 月 13 日 発行

発行 早稲田大学環境総合研究センターW-BRIDGE
〒162-0041

東京都新宿区早稲田鶴巻町 513

研究開発センター 3-102

TEL: 03-5292-3526 FAX: 03-5292-3527

E-mail: w-bridge@list.waseda.jp

URL: www.w-bridge.jp/

制作 W-BRIDGE

協力 西尾ゆかり

2012 Printed in Japan © W-BRIDGE